

## 幸いな人生を生きる

黙示録 1:1-3

幸いな人生とはどのような人生のことを言うのでしょうか？ 行きたいところに行けて、美味しいものを食べたりできることが幸せだという方がいるでしょう。病気にかからず健康でいるということが幸いであるという人もいます。確かにそれらのものは幸いということができません。幸いな人生について視点を変えて考えてみますと私たちは現在、過去、未来の中を歩んでいます。そして私たちの悩みの多くはその3つの中のどれかに当てはまります。現在、自分が歩みを進めているこの道で良いのか悪いのか？例えばこの仕事をしていて良いのだろうか？ もっと別の道があるのではないだろうか？ 確かに間違った道を通ると後で大変困ります。過去について今を生きているにもかかわらず過去のことで悩み、後悔と自責の念、時には罪悪感で悩んでいる人がいます。できたら過去のことをリセットして人生やり直しをしたい。あるいはなぜそんなことをしてしまったんだろう？と思ひ悩んだりします。また将来に対する不安、特に死について多くの人は恐れと不安を持っています。イエス・キリストは福音書にあるいわゆる山上の垂訓の中で「幸いなるかな」と幸いについて教えておられます。今日の黙示録には「幸い」ということばが7つ出てきます。これらの幸いはさしずめ黙示録版「幸い」についての教えといえるかもしれません。そしてこれらの7つは丁度私たちの現在、過去、未来にたいする答えを示しています。今日はそのことを見てゆきます。

### 1) 現実への答え・確かな道があること

「この預言のことばを朗読する者と、それを聞いて、そこに書かれていることを守る者たちは、幸いである。時が近づいているからである。」黙示録 1:3 とあります。

『子羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ、と書き記しなさい』と言ひ、また『これらは神の真実なことばである』と言った。」黙示録 19:9

「見よ、わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを守る者は幸いである。」黙示録 22:7

黙示録 19:9 に「これは神の真実のことばです」とあるように、聖書は神の真理の言葉です。ですから、これに聞き、これを心に留め、実行する人は幸いなのです。

人間には自由があります。しかし、それは何をしてもよい自由ではありません。魚は水の中でこそ自由に泳ぐことができますが、陸にうちあげられたら、生きていけなくなります。高速列車が性能を発揮できるのはレールの上を走るかぎりです。レールから外れたら悲惨なものになってしまいます。私たちも、神が敷いてくださったレール、神の言葉の上でこそ、自由であり、能力を発揮し、幸せであることができるのです。詩篇の一篇にこうあります。「幸いなことよ 悪しき者のはかりごとによらずに歩む罪人の道に立たず 嘲る者の座に着かない人。主のおしえを喜びとし 昼も夜もそのおしえを口ずさむ人。」詩篇 1:1-2

聖書は真実なことばです。真実なことばが私たちの人生を真実なものへと導いてくれるのです。聖書を読み、学び、実行する人は、この言葉の通り、実を結ぶ人生を送ることができるのです。

### 2) 過去にたいする答え・確かな赦しがあること。

次に黙示録は過去の罪からきよめられる幸いを教えています。過去の自分の歩みを振り返ると後悔すること、人に対する恨み、つらみ、そしてそれを赦せない自分がいます。「見よ、わたしは盗人のように来る。裸で歩き回って、恥ずかしい姿を人々に見られることのないように、目を覚まして衣を着ている者は幸いである」黙示録 16:15

「自分の衣を洗う者たちは幸いである。彼らはいのちの木の実を食べる特権が与えられ、門を通過して都に入れるようになる。」黙示録 22:14 とあります。

ここで「衣」と言われているのは、神が私たちに着せてくださった「義(ただ)しさ」、「聖(きよ)さ」

のことを意味します。私たちは罪を持っており、どこまでも義しく、すべてにおいて聖い神の前に、そのままでは出ることができません。罪を覆ってくれるものが必要なのです。黙示録7章に「白い衣」を着た人々のことが描かれています。一世紀の教会では、イエス・キリストを信じてバプテスマ（洗礼）を受けるときに「白い衣」を着ました。今もそうですが、バプテスマの水はその人の罪が洗い流されること、「白い衣」は信じてバプテスマを受けた者が神の前に「義しい者」とみなされることを表しています。ですから、「白い衣」を着た人々とは、信じてバプテスマを受けた人々を指しています。聖書は「幸いなことよ その背きを赦され罪をおおわれた人は。幸いなことよ 主が咎をお認めにならずその霊に欺きがない人は。」詩篇 32:1-2 と言っています。黙示録が「幸いである」と言っているのは、完全無欠な人の幸いではありません。罪を犯してしまっても、過去に悔やむことがあったとしても、それを悔い改め、そこから立ち返るなら、神はイエス・キリストのゆえに私たちの過去を咎め立てなさらず、一切の罪を赦してくださるのです。これに勝る幸いはありません。

しかし、私たちは弱い存在で、赦された罪を再び犯してしまい、神が与えてくださった白い衣を汚してしまうことが多いのです。ですから、罪の咎めから救われるだけでなく、罪の力からも救われる必要があります。罪の性質が死に義の性質が成長していく、汚れた衣が洗われ再び白くされなければならないのです。そうされることが「聖められる」ということです。では白い衣はどのようにして洗っていただけるのでしょうか。黙示録はこう言っています。「その衣を洗い、子羊の血で白くしたのです。」黙示録 7:14 普通、真っ白な着物に血がつけば、洗っても簡単にはきれいになりません。染みが残ります。しかし、「神の子羊」と呼ばれるイエス・キリストの血は違います。それは、どんな罪も洗いよめます。白い衣をいっそう白くするのです。これが神の言葉が告げるイエス・キリストの救いの力です。罪を赦されるばかりか、そこから聖められる幸い、このような幸いを与えてくださるお方はイエス・キリストの他ありません。

### 3) 将来への答え・・・死に勝利する確かな道があること

そして、さらに、黙示録は、死に打ち勝つ幸いを告げています。「書き記せ、『今から後、主にあって死ぬ死者は幸いである』と。」御霊も言われる。「しかり。その人たちは、その労苦から解き放たれて安らぐことができる。」黙示録 14:13

最初の言葉、黙示録 14:13 の「主にあって死ぬ死者」というのは直接的には殉教者を意味しています。黙示録が書かれた時、殉教者が続出しました。しかし、それと同時に人生の最後の時まで信仰を守り通した人も、「主にあって死ぬ人」に含まれます。主イエスのために、また、主イエスのゆえに他の人のために生きた人生は必ず報われます。人は「死んで終わり」ではないのです。聖書は「彼らの行ないは彼らについて行く」と言っています。つまり、地上での行いは天で報われるというのです。もし、人が「死んで終わり」なら、「あすは死ぬのだ。さあ、飲み食いしようではないか」コリント第一 15:32 ということになります。上手に世渡りをし、この世のものを精一杯楽しむ人が「幸いな人」だということです。しかし、しばらく考えれば誰も、それが本当の「幸い」でないことを知っています。

神の言葉を守る人は、神の恵みに取り囲まれ、祝福された日々を送ることができます。罪を赦され、聖められていく人は神の前に何度もやり直すことができるので人生に平安を持つことができます。イエス・キリストの救いによってすでに死に打ち勝っている人は、人生のどんな問題にも対処して勝利を取ることができます。私たちも、そんな幸いを求め、この幸いを大切にしたいと思います。祈ります。